

「最短突破 ディープラーニング G 検定 (ジェネラリスト) 問題集」正誤表 第2版 第3刷

書籍の内容に誤りのあったことを、本書をお買いあげいただいた読者の皆様および関係者の方々に謹んでお詫びいたします。

(2026年3月18日更新分)

p.147 問10 上から4行目

誤	選択肢2、3、4は、すべてオートエンコーダ (auto encoder) に関する説明です。
正	<p>選択肢2の「出力ユニットが直接入力ユニットに接続される」とは、出力側の節点と入力側の節点が中間層を介さず直接つながることを意味しますが、RBMにはそのような構造はありません。また、RBMには出力層という概念はなく3層構造でもありません。</p> <p>選択肢3、4は、すべてオートエンコーダ (auto encoder) に関する説明です。</p>

(2025年9月8日までの公開分)

p.46 問7 上から2行目

誤	2045年には人間が自分自身よりも賢い人工知能を作り出すことにより、
正	2045年には人工知能が自分自身よりも賢い人工知能を作り出すことにより、

p.68 「シンギュラリティ」の解説 上から1行目

誤	2045年には人間が自分自身よりも賢い人工知能を作り出すことにより
正	2045年には人工知能が自分自身よりも賢い人工知能を作り出すことにより

p.102 問4の解説 上から4行目

誤	賭け事などにおいて、勝てば掛け金が $p/(1-p)$ 倍になるような数値のこともオッズということがありますが、実は両者は同じものです(手数料などが取られない場合)。
正	賭け事では「賭け金に対する払戻金の倍率」をオッズと呼ぶことがありますが、ここで扱っているオッズの定義とは異なりますので注意してください。

p.125 上から4行目

誤	偽陽性率を上げても真陽性率が下がりにくくなるためです。
正	偽陽性率を下げるために閾値を大きくしても、真陽性率が下がりにくくなるためです。

p.184 問7 下から2行目

誤	3. Atorus Convolutionと呼ばれることもある。
正	3. Atrous Convolutionと呼ばれることもある。

p.202 問6 上から6行目

誤	必要なパラメータである
正	重要なパラメータである

p.249 上から2行目

誤	また、Atorus Convolutionと呼ばれる
正	また、Atrous Convolutionと呼ばれる

p.250 下から2行目

誤	選択肢1の説明はDilated (Atorus) Convolutionの説明です。
正	選択肢1の説明はDilated (Atrous) Convolutionの説明です。

p.226 上から2行目

誤	縦軸は訓練誤差 (エラー) を示しています。
正	縦軸は汎化誤差 (エラー) を示しています。

p.226 「▼二重降下現象 (エポック数を固定)」のグラフの縦軸

誤	訓練誤差 (エラー)
正	汎化誤差 (エラー)

p.271 上から9行目

誤	モンテカルロ木探索は、ある状態から行動選択を繰り返して報酬和を計算するということを複数回行った後、報酬和の平均値をある状態の価値とする価値推定方法です。
正	モンテカルロ木探索は、探索木を構築しながら価値の高いノードを選択する方法です。探索回数が少ない・勝率が高いノードを優先的に探索することで効率化が図られています。

p.288 上から6行目

誤	2020年に登場したRasNetStは高い精度を
正	2020年に登場したResNeStは高い精度を

p.327 下から3行目

誤	選択肢1のseq2seqは第5章のRNNのモデルの1つです。p. 263の解説を参照してください。選択肢2のpix2pixも
正	選択肢2のseq2seqは第5章のRNNのモデルの1つです。p. 263の解説を参照してください。選択肢1のpix2pixも

p.332 問 6 解説文の上から 4 行目

誤	として定義される逆頻度 (Inverse Document Frequency : IDF) の頭文字に由来します。
正	として定義される逆 文書 頻度 (Inverse Document Frequency : IDF) の頭文字に由来します。

以上

技術評論社 書籍編集部